

ドクトル・ゴットフリード・ワグネル(Dr. Gottfried Wagener) 略年譜

西暦	和暦	年齢	事項
1831	天保2	0歳	7月5日、ドイツ北部のハノーファー(Hannover)に生まれる。 (1846~1848年、生地 of 工芸学校に学び、いったんは鉄道に就職。)
1849	嘉永2	18	ゲッティンゲン(Göttingen)大学入学。
1851	同 4	20	同大学卒業(高等教員検定試験に合格、論文名「重力の加速度を決定する種々の方法の叙述」)。さらに1年間ベルリン大学にて学ぶ。
1852	同 5	21	8月、ゲッティンゲン大学にて数学の論文でドクトル・フィロゾフィーの学位を受く。 論文名「ポテノーの問題」、指導教授:K. F. Gauss。 以後8年間、パリにて数力国語・化学(J. B. Dumasに)等を学ぶ。
1860	万延元	29	スイスの工業学校の数学教師となる(1864年まで)。
1862	文久元	31	ロンドン万国博をワグネルが見学した。(日本は参加せず。日本の物品は、英国の駐日公使オルコックが収集したものが展示された。)
1864	元治元	33	ドイツで義兄と改良溶鉱炉、パリで弟と化学工場設置を計画(いずれも兄弟が失敗)。
1867	慶応3	36	パリ万博:日本が参加した最初の博覧会で佐賀藩として佐野常民が参加した。ワグネルは参加していない。このパリ万博には、日本から徳川幕府が慶喜の実弟を代表に28名を派遣したが、このうち3人が外国人で、その中にイギリス公使館通訳アレキサンダー・フォン・シーボルト(1846~1911)[大シーボルトと言われるフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(1796~1866)の長男]がいた。
1868	明治元	37	5月、ワグネル、長崎に来る(上海の米国系貿易会社ラッセル商会主任から弟の石鹼工場建設への協力を頼まれて)。石鹼売れず失職。
1870	同 3	39	ワグネルは佐賀藩の委嘱により肥前有田で製陶を指導。山林乱伐により水害起り、植林を指導。石炭利用を説き、石炭・木炭両用の窯を作り使用。佐賀藩の佐野常民がワグネルの知的能力・行動力がすぐれていることを知る。 廃藩置県(1871)のため佐賀を去り、10月東京に来て大学南校御雇教師となる。
1872	同 5	41	3月、大学東校教師に転ず。2月、ワグネル、オーストリアのウィーン万国博覧会御用掛となる。(御用掛には6人の外国人がいた。その中にはアレキサンダー・フォン・シーボルトとその弟ヘンリー・フォン・シーボルトがいた。10月、佐野常民、博覧会事務副総裁に。 翌1873年5月~10月博覧会開催。ワグネルは出品物の選択・製作指導。
1873	同 6	42	佐野以下博覧会に向け2月25日横浜出帆、4月4日ウィーン着、先着者含め70余名。 ワグネルは、博覧会後同行者20数名にヨーロッパ技術を学ばせた。 (出発前、ワグネルは近代的な中等~専門技術教育機関設置を文部省に建議)
1874	同 7	43	ワグネル、東京開成学校の理化学教師となる。2月23日東京開成学校内に「製作学教場」創設
1875	同 8	44	ワグネル、製作学教場教師を兼任。 また内務省勸業寮の顧問、さらに博物館兼勤。 (この年7月、手島精一、東京開成学校雇、同年8月同校「監事」となる)

1876	同 9	45	ワグネル、米国フィラデルフィア万国博覧会事務嘱託。 この年3月、手島精一が「製作学教場」事務取締役兼勤となり、さらにフィラデルフィア万博事務のため渡米。
------	-----	----	---

(裏面へつづく)

1877	同 10	46	2月、「製作学教場」の廃止、さらに勸業寮事業の停止によりワグネル失職。 この間「七宝」製造の研究を行う。
1878	同 11	47	3月、ワグネル、京都府に招かれ医学校で理化学を、舎密局で工業化学製品の製造を教える。 舎密局内に、ワグネル設計による薪・石炭共に使える陶器窯を、耐火煉瓦を用いて築く。
1879	同 12	48	五条坂の西大谷前北側に舎密局管轄の陶磁器実験工場建設、使用。 名画粉本(ふんぽん)大量に収集。
1881	同 14	50	京都舎密局廃止され失職。帰国するアトキンソン(R.W. Atkinson、1850-1929)の後を受けて、東京大学理学部化学科教授に招かれ、製造化学を担当。この年東京職工学校創設。
1882	同 15	51	農商務省の依頼で陶器焼成窯を設計・製作(舎密局のと同じ)
1883	同 16	52	植田豊橋を助手に、神田(現学士会館近く)の東京大学理学部化学教室で陶器吾妻焼(旭焼)の創製研究開始。
1884	同 17	53	この年、ワグネル、小石川の江戸川町の小工場空屋を借り、ろくろ・窯等を据え付け、吾妻焼製造実験開始。6月25日ワグネル東京大学教授解任。 11月東京職工学校の教師となり、窯業学を開講。
1885	同 18	54	ワグネル、農商務省兼勤となる。吾妻焼製造実験工場を麻布霊南坂下に移転。
1886	同 19	55	ワグネルの提言で、東京職工学校に陶器玻璃工科設置。ワグネルがその主任となる。 この年11月、「吾妻焼」施設・設備を東京職工学校に移し、「旭焼」と改称。
1888	同 21	57	ワグネル、榎本農商務大臣に、自筆の英文で、「織物工業学校意見書」を書き提出した。
1890	同 23	59	手島精一はこの年3月5日に、第2代東京職工学校校長となり、3月24日学校名を東京工業学校と変更、8月に化学工芸科、機械工芸科を改組して、化学工芸部、機械工芸部とし、化学工芸部に染織工科、陶器玻璃工科、応用化学科の3科を置き、機械工芸部に機械科、電気工業科の2科を置いた。
1890	同 23	59	ワグネル、愛知・岡山・山口・佐賀・長崎の陶業地視察。途中で発病、9月賜暇を得てドイツの故郷に帰る。 この年渋沢栄一・浅野総一郎らの出資により旭焼組合ができ、「東京深川区東元町旭焼製造場」設立。(1896[明治29]年閉鎖。)
1892	同 25	61	1月帰来して原職に復す。 11月8日東京駿河台の自宅にて永眠。11月12日葬儀、青山墓地に葬られる。

1894	同 27		陶器玻璃工科を窯業科と改称。
1899	同 32		染織工科を染織科と改称し、染織科に色染分科、機械分科の2分科を置く。